

大分県内の他地域に繋がる事業展開を語り、緩やかな連携、ネットワークを図っていくことで、地域のクリエイティブに携わる人数を増やしていきたいといった展望を述べ、発表を締めくくった。

ディスカッション

ファシリテーターの吉本氏が、「文化や芸術を通じて、地域に働きかけ、より活力のある社会をつくり出す」という視点が全ての発表に共通していると述べ、そこに焦点をあてたディスカッションが行なわれた。

衛氏より可見市文化創造センター ala が可見の市民生活に根付き、人口増加にも繋がっていると語り、山出氏は集客人数の増加だけではない価値の在り方について言及した。次に、創造の場であるという目的と、そこで生まれてくる観光や経済効果という結果の関係性をテーマに、模索しながらも先端を走り続ける 21 世紀美術館の取組が紹介された。さらに、山出氏からは、アートが「地域の課題解決する」のではなく、問題を提起しているのであり、その「気付き」によって活性化した我々市民が、社会を変えていくのであると持論を展開した。最後に、吉本氏より全国に広がっているこのような創造都市の取組が、2020 年を一つの契機として新しい展開にチャレンジしてほしいとの期待を述べて、ディスカッションを終了した。

3) 第三部 ワークショップ「地域における文化プログラムの実施に向けて」

参加者を4グループにわけ、文化審議会文化政策部会委員による「第4次文化芸術の振興に関する基本的な方針」の説明及び、セミナー参加者との意見交換がおこなわれた。

(4) 平成 27 年度クリエイティブ cafe (文化庁文化芸術創造都市振興室)

1) 目的

コンセプト 関西でまちづくり、文化や産業などの様々な分野で、悩みを抱えながら、現場で日々奮闘している人たちが集まり、自由に語り、聴くことを丁寧に積み重ね、新たな創造へつなげるプラットフォームを形成し、課題の解決を目指すものとした。

期待される成果と目標 市民、行政・NPO、学生等多様な立場で文化、芸術、産業等にかかわる“人”と“人”とが交流し、対等な立場で議論することにより、創造的な課題解決のできるアイデアの醸成と人材の育成につなげることを成果目標とした。

2) 開催概要

開催テーマ 今年度は、2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けた文化プログラムの周知をはかるとともに、文化振興に取り組まれている団体や自治体との連携企画とした。

3) 事業報告

第8回 「フランスの文化政策との出会い」

日程：平成27年6月27日(月) 16時30分～18時30分

会場：アンステイチュ・フランセ関西

ゲスト：シャルランリ・ブローズ氏(在京都フランス総領事、アンステイチュ・フランセ関西館長)

共催：アンステイチュ・フランセ関西(フェットラッドミュージックとマルシェを同時開催)

参加人数：42名

アンステイチュ・フランセ関西のミッションはフランス語を教授することと、文化の伝搬や交流をすること。京都グラファイアへの協力やニューブランシュの開催を通して、フランス文化を知ってもらう場を提供されている。アーティスト

ト・イン・レジデンスであるヴィラ九条山は、昨年リニューアルし、招聘アーティストの分野を文学や舞台演出に広げ、工芸職人や、日本人アーティストとの共同プログラムを受け入れるため、パリと京都で新しいアートや産業を作っていくことを期待している。フランスはこれまで、フランス文化を世界に広めるやり方をしてきたが、現在は交流が大事とっており、日本もオリンピック・パラリンピックを通して、世界中の人と交流や対話を進めていくことが大切との話であった。

第9回「神山発!日本の田舎をステキに変える〜アートとITによる未来の働き方」

日程：平成27年7月23日（木）16時00分～19時30分

会場：京都府職員研修・研究支援センター、京都府立大学稲盛記念会館たまごカフェ

ゲスト：大南信也氏（NPO 法人グリーンバレー理事長）

共催：京都府立大学京都政策研究センター（連続自治体特別企画セミナーとのタイアップ）

参加人数：53名

神山町はNPO 法人グリーンバレーを中心に、アーティストの滞在満足度を上げることに力点を置いた住民参加のアートによるまちづくりや、町の将来に必要な移住者を指名して誘致するワークインレジデンス、サテライトオフィスの開設誘致に取り組んできた。その結果、商店街に活気が戻り、町外に出た若者が帰りやすいIT企業など魅力的な雇用環境が創出されている。過疎は避けることは出来ないが、人口構成の健全化や仕事を持った人材を誘致するなど、人の質に着目し、地域がどうなっていきたいのかという目標を中心に据えて、課題解決にあたること。神山は遍路文化や外国人のホームステイを13年間受け入れてきたため、移住者への垣根が低かったが、移住者優遇より地域が移住者を受け入れる環境になるかどうか重要との話であった。

第10回「アーティスト・イン・レジデンス、OPEN」

日程：平成27年9月25日（金）18時00分～20時00分

会場：京都芸術センター

ゲスト：ディラン・シェリダン氏／ローラ・ハインドマーシュ氏（オーストラリア在住、サウンド／ビジュアルアーティスト）

ロサム・プルデンシャド・ジュニア氏／ミア・カバルフィン氏（フィリピン在住、ダンサー）

共催：京都芸術センター

参加人数：36名

2組のアーティストに、レジデンス事業に参加した目的や成果について語っていただいた。ディランとローラは、メルボルン大学のAsialink共同プログラムを活用したレジデンス事業に9月から参加し始めたところで、「序破急」の理解と実践を目的にしている。京都を選択した理由は、滞在経験はないものの、古いモノと新しいモノを掛け合わせるには、京都が良いと思ったからであった。また、ロサムとミアは2012年のレジデンス事業参加したダンサーであり、同事業をきっかけに、デュオとして活動することを決意したとの話であった。レジデンス事業の効果の1つとして、滞在アーティストを通して世界各国のレジデンスとつながりが生まれるとの話もあった。

第11回「クリエイティブ産業の新たな展開」

日程：平成27年11月2日（月）16時00分～18時30分

会場：横浜ランドマークタワー BUKATSUDO

ゲスト：広瀬郁氏（横浜市創造的産業振興モデル事業 コーディネーター）

浜野慶一氏（株式会社浜野製作所 代表取締役）

小林佳菜氏（経済産業省 商務情報政策局生活文化創造産業課 統括係長）

共催：横浜市文化観光局

参加人数：36名

横浜市では、中小企業の高い技術力とクリエイターとのコラボレーションにより新たな価値を生み出しながら、クリエイターの活躍の場を創出する創造的産業振興モデル事業を平成26年度から実施し、顧客がプラモデルを作るように組み立てる照明器具や人造サファイアの指輪などが試作されている。また、浜野製作所は従来の金属加工業に加え、3Dプリンターなどのデジタル工作機器を導入し、設計も含めた顧客企業の商品開発・加工を町工場の職人が支援する取組をしているとの話であった。これら日本の優れた地方産品や民間のビジネスの海外需要開拓・拡大を後押しするため、経済産業省では、クールジャパン政策やThe Wonder 500事業など、デザインの力を活用した地方創生やイノベーションに向けた政策を展開しているとの話であった。

第12回「アートが農村をステキに変えた」

日程：平成27年12月13日（日）14時30分～16時30分

会場：大庄屋上野家

ゲスト：片木孝治氏（京都精華大学 非常勤講師、株式会社応用芸術研究所 代表取締役所長）

新山直広氏（合同会社 TSUGI 代表社員 / デザインディレクター）

共催：舞鶴市、公益財団法人舞鶴文化事業団

参加人数：47名

河和田アートキャンプが、福井県鯖江市河田地区で、2004年の豪雨災害復興支援をきっかけに、社会にアートが貢献できることを切り口に取り組みされている。キャンプの活動主体は大学生であり、約1ヶ月の滞在生活を中心に、単なるアート作品の展示ではなく、農業や漆器産業など地域生活と密着した創作を、住民と一緒に考えて進められている。また、6、7年目頃には、地域の夏祭りの日程をファイナルイベントの日程に変更するなど、地域住民の目線や関わり方が変わり、住民が自主的に行う事業を支援する仕組みができたり、1ターン移住者が約14人に増え、デザインユニットの起業をしたりと活動が広がっている。住民がアートに触れることで、自分たちのアイデアを出したり閃いたり、できるという自信に慣れていったのではないかとの話であった。

第13回「豊岡の挑戦」

日時：平成28年3月10日（木）13時30分～16時30分

会場：城崎国際アートセンター

ゲスト：中貝宗治氏（豊岡市長）

平田オリザ氏（劇作家・演出家、豊岡市芸術文化参与）

共催：豊岡市、城崎国際アートセンター

参加人数：48名

豊岡市はコウノトリをシンボルとして、「小さな世界都市」を目指した戦略的なまちづくりを展開している。コウノトリも生きられる町はアーティストも生きられる寛容な町であり、移住者を受け入れるが、その視点は市民、特に子どもに向いている。ローカルであることはグローバル化の中で輝くチャンスとして、ジオパークやコウノトリなどのふるさとの魅力・面白さを市民や子どもたちに感じてもらうと同時に、舞台芸術に特化したレジデンスである城崎国際アートセンターは、アーティストが作品制作に訪れ、世界最先端・最高峰のアートを知る場所となる。アートの役割は多様性を理解させることで、英語や演劇を通した子どもの表現力やコミュニケーション能力向上の教育に力を注ぎ、大学卒業後に自信を持って豊岡に帰る子どもを増やす狙いがある。世界中から来る人に、豊岡の魅力を誇りを持って、英語というツールを用いて、豊かな表現力で語る小さな世界都市の市民が育てば、人口は減っても、元気な町は存続するとの話であった。